

〈論文〉

# 19世紀後半ユカタン半島における エネケン産業の発展(1853~1902年)

—伝統的アシエンダからエネケン・プランテーションへの移行—

初 谷 讓 次  
(天理大学)

## Sumario

Joji Hatsutani: "El desarrollo de la industria henequenera en Yucatán en la segunda mitad del siglo XIX—la transición de la hacienda tradicional a la plantación henequenera, "

En los años del Porfiriato, la producción agrícola para la exportación aumentó notablemente. En la Península de Yucatán el cultivo del henequén alcanzó su máxima extensión en la historia. El auge henequenero estaba ligado estrechamente a la demanda creciente en los Estados Unidos. El henequén cobró gran importancia para la producción de trigo en los Estados Unidos, ya que con el hilo de henequén se ataban las cosechas de trigo.

El henequén, una variedad de agave, es originario de la Península de Yucatán. Los antiguos mayas utilizaban la fibra extraída de su hoja en muchas formas. Pero, entre los españoles no hubo de hecho ningún intento organizado para cultivar comercialmente la planta. Después de la Independencia de México, el gobierno estatal de Yucatán empezó a fomentar la expansión del cultivo. En 1830 se organizó una compañía

que se dedicaba exclusivamente al cultivo y comercialización del henequén. Posteriormente, sobre todo después de la guerra de castas (1847-53), la producción henequenera se fue incrementando y llegó a tener una importancia predominante en la época anterior al porfiriato, en el que alcanzó su auge. El crecimiento de la producción henequenera en Yucatán propició la transformación de prácticamente todas las haciendas de tipo ganadero, maisero o mixtas, en las plantaciones hanequeneras. El propósito de la presente investigación es el de aclarar el proceso de la transición de la hacienda tradicional a la plantación henequenera, analizando los cambios de los elementos básicos de producción: el mercado, la tierra, el capital, la mano de obra y la máquina desfibradora.

## I はじめに

「進歩と秩序」をスローガンとするディアス独裁体制期（1877～1911年）のメキシコ経済は飛躍的な発展を遂げた。しかし、その発展は世界市場とむすびついた輸出向け生産部門に限られていた。しかも、それは外国資本の積極的導入によるものであった。農業部門においては、エネケン、コーヒー、タバコ、綿花、ゴムといった輸出作物の生産が拡大した。メキシコ南東部に位置するユカタン半島では、この時期アメリカ合衆国の穀物結束用麻紐の原料としてのエネケンに対する需要の拡大に応じて、空前のエネケン・ブームが起こっていた。エネケン・プランテーションは多額の資本で高度な機械設備を備え、大規模な海外市場向け生産をおこなっており、その点では十分に資本主義的要件を満たしていた。しかし、そこでの生産関係は前資本主義的性格を色濃く残しているどころか、プランテーションの発展に伴ってむしろそれが強化された。

本稿の目的は、このユカタン半島におけるエネケン・プランテーションの発展を形成期（1853～80年）と最盛期（1880～1902年）に分け、市場、

土地、資本、労働力、機械・鉄道といった主要な生産諸要素の変化を軸にして明らかにすることである。

## II エネケンの商業的栽培の開始と発展の基本線

エネケンは竜舌蘭の一種で、メソアメリカ原産である。その葉から抽出される繊維は抗張力があり、腐敗しにくく、先スペイン期からロープの原料として利用されていた。植民地時代に入り、錨索、蚊帳、ハンモック、袋などエネケンの加工品目は多様化した<sup>1)</sup>が、生産は依然として原住民共同体内の家族単位でおこなわれていた。植民地末期になって、地域経済発展の観点からエネケンの商業的栽培育成の必要性が主張されるようになるが、それが実現されるのはメキシコ独立後のことである。

独立まもない1828年、ユカタン州政府は、「すべてのユカタン市民は最低10株のエネケン进行栽培すること」という内容の法令をだした。この法令がどの程度の現実的効果を発揮したかは別にして、これによって州政府が初めて公式にエネケン産業育成の意思表示をおこなったことになる。そして1830年、資本金7,500ペソで「エネケン栽培加工会社」が設立され、838ペソで新たに購入された土地にエネケンが植えられた。こうして、エネケンのみを栽培するアシエンダが誕生した。しかし、この初の試みは労働力不足によって失敗したと伝えられている<sup>1)</sup>。

エネケンの栽培は土地の測量に始まり、木の伐採、畑焼き、植え付けと続く。そして、年に3回の除草作業が必要で、収穫までには6～7年を要する。成熟すると、年に3回、1株あたり8～15枚の葉が収穫される。およそ20年がこの植物の寿命である。エネケン栽培には年中多くの労働力を必要とする。原住民共同体が根強く残存するユカタン半島において、労働力問題はエネケン産業にとって解決すべき最大の問題の一つであった。また、同時代の資料によると、エネケンの栽培を始めて5年目にやっと年間収支バランスがプラスになり、累積収支バランスがプラスになるのに9年もかかる<sup>2)</sup>。このため、後述する多額な設備費に加えて、操業開始から9年

間をもちこたえるための資金が必要となる。これに、土地の問題を加えて、土地、資本、労働力という生産の3要素がユカタンのエネケン・プランテーション経営に不可欠の条件であり、解決しなければならない問題点であった。

さらに、刈り取られたエネケンの葉は24時間以内に繊維を抽出しなければ、乾燥してしまって堅くて手に負えなくなるため<sup>3)</sup>、エネケン畑から繊維を分離する機械室まで葉をスピーディーに輸送するためのアシエンダ内鉄道の敷設も不可欠であった。そして、アシエンダから輸出港プログレソまでの輸送用の鉄道建設も急を要した。また、技術面而言えば、繊維の分離工程の機械化も急務であった。これらの様々な問題点を少しずつ克服しつつ、エネケン産業は発展を遂げていく。

なかでも、労働力の問題が最大のネックとなっており、プランテーション発展の基本線を規定した。エネケン栽培地帯は19世紀後半から現在に到るまでほとんど変化しておらず、ユカタン州の北西部に位置する。エネケンの商業的栽培が始まる1830～40年代において、この北西部には伝統的な牧畜＝トウモロコシ・アシエンダが存在していた。しかも、すでにこの地域ではアシエンダに居住するインディオ人口の比率が高く、全インディオ人口の50%を越えていた<sup>4)</sup>。この地域においてエネケン産業が発展したのは偶然のことではない。新たにエネケン・アシエンダを経営しようとしても強固な共同体から労働力を引き出すことは容易ではない。したがって、すでに存在した牧畜＝トウモロコシ・アシエンダを近代的なエネケン・プランテーションに移行させる形での発展しか許されなかったのである。この移行が本格的に始まるのはカスタ戦争が終結する1853年以降のことであった。

### III 形成期 (1853～80年)

#### 1 モノカルチャ構造の形成

##### a) 輸出構造の変化

19世紀前半のユカタン半島で発展したサトウキビ産業が域内消費用であったのに対し、エネケン産業はもっぱら輸出向け産業として発展した。表1はユカタン州のエネケン輸出額の推移を示すものである。まず、1845年と1869-70会計年度の輸出額を比べると、この間に6倍強になっている。その後最盛期を迎える1880年までは安定した数字を示している。また、表には載せなかったが、ユカタン州輸出総額に占めるエネケン輸出額の割合は、1845年には13.7%にすぎないが、1875-76会計年度には、69.8%になっており<sup>9)</sup>、すでにモノカルチャ構造の原型が出来上がっている。

さらにその内訳をみると、当初は加工品が90%近くを占めていたが、1870年代には逆に未加工エネケンが80%前後を占めるようになり、1880年代には90%を越えている。ついで、表2は1872-73会計年度の相手国別の加工・未加工のエネケン輸出額を示している。未加工エネケンの93.9%が合衆国向け、加工品の96.2%がキューバ向けであることがわかる。ここで言う加工品とは、袋、索具、紐、ハンモックなどであるが、そのうちキューバへはコーヒー豆を詰めるための袋が輸出されていた。そして、合衆国へは主に商船の索具の原料として未加工エネケンが輸出された。すなわち、加工品はキューバへ、未加工エネケンは合衆国へというパターンが確認できる。そして、表3はその推移を示している。これによると、すでに1870年代には合衆国がキューバを抜いており、しかも74年には合衆国が80%近くまでシェアを伸ばしており、モノマーケット化の進行を明示している。

##### b) 生産構造の変化

表4は19世紀中頃から20世紀初頭までのユカタン州の主要作物である

トウモロコシとエネケンの作付け面積の推移を示している。総作付け面積に占める比率を知ることができる1862年と1883年についていえば、エネケンとトウモロコシがユカタン総作付け面積の95%以上を占めている。そして、エネケンについていえば、6.5%（62年）から59.4%（83年）に作付け面積比率を伸ばしている。逆に、主食のトウモロコシは、89.6%（62年）から36%（83年）に減っており、絶対面積も減少している。それゆえ、80年代にはトウモロコシの輸入が開始されている。このようにして80年代初頭には、ほぼエネケンのモノカルチャ構造が完成していたといつてよい。

## 2 資本の調達

後述するように、エネケン・プランテーションの経営には、土地はもちろんのこと、分離機、梱包機、軽便鉄道などの諸施設の費用がかさむうえに、エネケンを植付けてから8～9年間は利益が生じないため、かなりの額の資本を必要とする。1916年、合衆国上院における報告によると、エネケン・プランテーションの設立には、13万ドル（26万ペソ）の資本が必要であった。ちなみに、トウモロコシ＝牧畜・アシエンダはその約50分の1の5,000ペソで創業できた<sup>6)</sup>。

カスタ戦争後の、ユカタン州の資本不足は深刻であった。同州には年利18～24%で貸付ける高利貸しかおらず、徐々に年利9%の外国資本（合衆国）の信用を利用するようになっていった。融資を受けたプランターは返済を現物でおこなうというリーエン契約（収穫担保制）の形がとられ、返済時のエネケン価格の査定は相場より低くなされるのが普通であった。この契約はプランターと合衆国の金融業者が直接結ぶのではなく、エネケン輸出商を営む現地の地方オリガルキーの仲介によってなされた。1860年代初頭、エウセビオ・エスカランテ会社（Eusebio Escalante e Hijos）はニューヨークのシボー商会（Thebaud Brothers）と手を結び、リーエン契約の仲介を始めた。年利9%のうち、5%が銀行の利子、残り4%をエス

カランテ会社とシボー商会がコミッションとして折半した。その後、マヌエル・ドンデ会社 (Manuel Dondé y Cía) もシボー商会と手を結び仲介業を始めた<sup>7)</sup>。こうして、60年代には資本調達の問題は解決されるが、しだいにエネケン・プランターはエネケン輸出商を経営する地方オリガルキーに、そして彼らを通じて合衆国資本に従属してゆくことになる。

### 3 労働力の確保 (内生的プロレタリア化)

メリダ周辺 (現在のエネケン地帯) を除いてユカタン半島全域に広がったインディオ反乱 (カスタ戦争) は、地域経済に壊滅的打撃を与えて、1853年に形式的には終結した。特に、半島南部・東部のサトウキビ・アシエンダは全滅し、19世紀前半に発展をみた砂糖産業は再び復興することはなかった<sup>8)</sup>。カスタ戦争の戦死者は15万人、そして2万人は英領ホンジュラスやキューバに逃れた。とはいえ、カスタ戦争の影響は半島内で一様ではなく、地域差がみられた。反乱の直接の原因をなすサトウキビ産業が発展した南部・東部は被害が大きく戦死者も多い。しかも、形式的終了後も東部の密林地帯に逃れた反乱集団のゲリラ攻撃を受ける危険性があり、この地域からかなりの人口が安全な北西部地域へ流出した。一方北西部では反乱の被害が少なかったうえ、反乱終結後も自主的な形で移民が流入してきたため、メリダ、テコー、マシユカヌー、アカンセー、ウヌクマ、プログレソといった北西部の諸地区の人口は順調に増えた。そして、1846年にはユカタン州全人口に占める北西部の人口の比率は21.8%であったのが1862年には33.5%、1883年には41.1%まで増大した。逆に南部・東部地域の人口は減少し続け、1846年には両地域の人口が全人口の53.4%を占めていたが、1862年には35.2%、1883年には28.2%までに落ち込んだ<sup>9)</sup>。このように、カスタ戦争後に発展したエネケン産業にとって、結果として人口が北西部に集中したことによって、むしろカスタ戦争がプラスに働いたといえる。しかしながら、人口の実数は1900年になっても、1846年すなわちカスタ戦争以前の水準に回復することができず、北西部においてすら絶

対的労働力不足は否めなかった。

さて、エネケン・ブーム以前のユカタン半島にみられた農業労働力の形態は次の通りである。

- 1) 定住ペオン (peón acasillado) : アシエンダに居住し、賃金労働する。債務によって移動の自由が制限されている。小屋、木材伐採権、家畜放牧権、水利権、小土地用益権が与えられている。
- 2) ルネーロ (lunero) : ユカタン独特の労働形態である。アシエンダ領域内に居住し、土地用益権、木材伐採権、家畜放牧権、水利権を与えられるかわりに、週に1日(月曜日=lunes:これがルネーロの語源になっている)直営地で無償労働する義務があった。
- 3) 分収小作農 (arrendatario) : 収穫の10~15%の現物による子作料支払い以外何の制約もない。
- 4) 臨雇労働者 : 北西部のエネケン地帯には存在せず、カスタ戦争以前の南部・東部のサトウキビ地帯に広くみられた形態である。サトウキビ栽培の労働力の季節的性格、すなわち、収穫期(サフラ:4~5月)に大量の労働力が必要になるため、定正常雇労働者より臨雇労働者にたいする需要のほうが高かった<sup>10)</sup>。

理論的には、1)定住ペオンのみがアシエンダに緊縛されている。北西部のトゥモロコシ=牧畜・アシエンダはそれ程多くの定住労働力を必要としないため、2)ルネーロ、3)分収小作農という柔軟性のある労働形態はむしろアシエンダ側にとって都合がよく、特にルネーロは労働形態の主流を成した。しかも、北西部では共同体を離れてアシエンダに居住するインディオの割合が高く、18世紀末から19世紀初頭にかけての植民地末期にすでに53%を記録している。ちなみに、南部・東部諸地域では10%そこそこであった<sup>11)</sup>。

そこで、北西部においてエネケン栽培が始まり直営地労働力の需要が高まった時、まず内生的プロレタリア化、すなわちルネーロのペオン化という形で対応した。具体的には、小作地を取り上げ、直営地労働力に転化す

ることである。1870年頃には、水や土地のかわりに夫役労働を行なうということとはなくなり、すべて賃金労働者になっていた<sup>12)</sup>。

ユカタン州ではまだまだ原住民共同体が堅固で、新たにそこから労働力を引き出すことは困難であった。それでも、自主的に共同体を離れアシエンダに居住するインディオもいた。アシエンダに移り住むメリットは、2つ考えられる。まず、兵役の問題である。前述のように、カスタ戦争が形式的に終了したあともクルソブ(cruzob)と呼ばれる集団が東部の密林地帯を拠点に20世紀初頭までゲリラ戦を続けた。そのため、ユカタン州では、このクルソブの攻撃から州秩序を守るための兵役(15~60才の男性)があった。この兵役は、病気の場合、一定額のお金を支払った場合、そしてアシエンダの定住ペオンである場合に免除された。また、ファヒーナ(fajina)と呼ばれる道路建設のための夫役労働の義務もあった。年に2度狩り出されるこの夫役も兵役の場合と同じ条件で免除された<sup>13)</sup>。

以上のようにこの時期は、アシエンダの内生的プロレタリア化と共同体成員の自発的プロレタリア化に特徴付けられる。共同体そのものの解体による新たな労働力の本格的な創出過程が始まるのは、ディアス期に入ってからである。

#### 4 機械化

刈り取ってきたエネケンの葉から葉肉を削りとり、葉脈すなわち繊維を抽出する、いわゆる分離工程の機械化はエネケン産業発展の必須条件であった。伝統的な木製道具(tonkos, pakché)を用いての手作業では効率が悪い上に繊維を傷める。エネケン産業の育成を図るユカタン州政府は、プレミアム制度を導入して分離機の開発を推進した。1830~40年代は外国人による発明が相次いだが、いずれもパテントを得ても商品化の段階まで到達しなかった。とはいえ、この19世紀中頃までの時期は、機械化するうえでの問題点が整理されたという意味において、準備期と位置付けることができる。ユカタン州政府は1852年、新たにプレミアム獲得のための条件

を詳細に決めた。主な課題は性能，操作性，強度，コスト，等であった<sup>14)</sup>。

その後，3人のユカタン人がそれぞれ新しい機械を開発した。1857年3月，これら3台の分離機の性能実験が実施された。ホセ・マリア・ミジェー（José María Milled）の機械は21時間で2,017枚の葉を分離し，124ポンドの繊維を抽出した。フロレンティーノ・ビジャモル（Florentino Villamor）の機械は21時間で1,615枚の葉を分離し，63ポンドの繊維を抽出した。そして，ホセ・エステバン・ソリス（José Esteban Solís）の機械は21時間で6,342枚の葉を分離し，373ポンドの繊維を抽出した。その後，最高の性能を誇るソリス機を中心にして分離機が急速に普及し始めた。1863年ソリスは2,000ペソのプレミアムを獲得した<sup>15)</sup>。

そして，1861年には分離機の動力として蒸気エンジンが導入され，それまで畜力だった分離機の性能が大幅に向上した。1876年，ユカタン州で使用されていた600台の分離機のうち400台が蒸気エンジンを備えていた<sup>16)</sup>。1883年には，1,000台を越す分離機がユカタン州に存在した<sup>17)</sup>。こうして，80年代以降の空前のエネケン需要に対応する技術的基盤が出来上がった。

#### IV 最盛期（1880～1902年）

##### 1 モノカルチャ構造の深化

###### a) 輸出構造の変化

1880年代の合衆国向け未加工エネケンの輸出の急増は南北戦争後の合衆国における農業の機械化と結び付いている。南北戦争により3分の1の人口を失った北部農民が，その労働力不足をなんとか機械でカバーしようとしたため，作れば売れる広大な市場が農機メーカーの眼前に現れた。農機メーカーは，従来のリーバーと呼ばれる刈り取り作業専門機に，それまで人力に頼らざるを得なかった結束作業過程を新たに機構の中に組み込もうとした。まず1871年，針金を結束に用いる自動刈り取り・結

束機（ワイヤー・バインダー）が開発された。これは、刈り取りから結束まで1人でできるという点で画期的な技術革新であり、すぐに商品化され、急速に普及した。しかし、このワイヤー・バインダーには重大な欠陥があった。それは、結束作業に用いられる針金のくずが穀物のなかに紛れ込むことであった。このバインダーで刈り取った麦わらを家畜の餌にしたところ牛が腹痛を起こして死亡するという事件が頻発した。牛を解剖したら、胃の中から針金のくずがたくさんでできた。この欠陥を克服するために、針金のかわりに安全な麻紐（towine）を用いるバインダーの開発が進められ、ついに1875年に完成する。その後、トワイン・バインダーは商品化され80年代に急速に普及し始めた<sup>18)</sup>。エネケンはこの麻紐の原料に最適であり、トワイン・バインダーの普及に伴って、合衆国のエネケン需要は急増した。合衆国の索具メーカー、ブローカーはエネケンを買いあさり始めた。

再び表1をみてみよう。1880年代に入り、エネケン輸出額が急増していることが確認できる。エネケン・ブームの始まりである。そして、その後も輸出額は伸び続け、1902年には1881-82会計年度と比較すると、15倍にもなっている。1902年のエネケン輸出額はユカタン州総輸出額の96.8%を占めており<sup>19)</sup>、完全なモノカルチャ構造が確立している。そして、その内訳をみると、未加工エネケンが97.5%を占めており、ユカタン州は合衆国へ原料を供給する巨大なプランテーションと化したといえる。また、ユカタン州のエネケン輸出額はメキシコ輸出総額に占める割合は、80年代には5%を越えており、未加工非耐久生産財（すなわち原料用農産品）にかぎって言えば、エネケンは30%前後を占め、トップの地位を誇っている<sup>20)</sup>。

#### b) 生産構造の変化

前章でみたように、最盛期の始まる1880年頃にはすでにエネケンのモノカルチャ構造が形成されていた。そして、エネケン需要の拡大に対応し、その後さらに作付け面積は拡大してゆき、1910年には1883年の4倍強にまで伸びている [表4参照]。

ところで、アシエンダによる土地拡大プロセスは耕地面積の拡大という側面と同時に、共同体の破壊＝労働力の抽出という側面からも考察する必要がある。表5はユカタン州における土地譲渡の件数と面積を示したものである。1867～76年のいわゆる復興共和国期には土地譲渡件数は僅か54件であるが、その平均面積は823ヘクタールと大きな数値を示している。一方、1877～1910年のいわゆるディアス期には土地譲渡件数は急激に増えている反面、その平均面積は66ヘクタールとずいぶん小さな数値を示している。そこで、ディアス期についてその内訳を詳しく示したのが表6である。予想通り全件数の96%以上が共同体の共有地の分割譲渡であり、その平均面積は11ヘクタールと小さな数値を示している。復興共和国期に土地譲渡の平均面積が大きいのは、国有地、荒蕪地の譲渡が多く、共同体の共有地の分割譲渡はほとんど行なわれなかったためであろう。1856年のレルド法や1857年憲法によって共同体や教会の永代財産であった土地の解体が規定されたが、少なくともユカタン州においては、共同体の土地分割が本格的に実施されるのはディアス期に入ってからのものであった。ディアス期に66のエヒード(134,000ヘクタール)が土地をエネケン生産に譲り渡した<sup>21)</sup>、というデータが残されている。もちろん、ディアス期に入って国有地、荒蕪地の譲渡も増加している。

ここで、アシエンダの土地拡大過程について、メリダの北東約15キロに位置するアシエンダ・シュクユム(Xcuyum)のケースをとりあげて具体的にみておきたい。同アシエンダでは、1830年代にエネケンの生産が始まるが、当初は牧畜・穀物生産を補完する程度であった。その後、同アシエンダはエネケンの栽培を徐々に広げてゆくにつれて、土地を少しずつ拡大していった。表7は、アシエンダ・シュクユムの土地拡大過程を示している。土地獲得には次の3つの方法があった。

- 1) 近隣の小土地所有者からの購入：この方法によって、19世紀を通じて徐々にそして確実にアシエンダは土地を拡大していった。
- 2) 荒蕪地譲渡：カサレス家(アシエンダ所有者)は1887年、510ヘクター

ルの荒蕪地譲渡を申請し認められている。

3) エヒード分割地の購入：1888年から1893年にかけて、コンカル村、モコチャー村、シテパチ村、ヤシユククル村から多数のエヒード分割地を購入した。例えば、コンカル村は1889年6月8日に連邦政府によって共同体成員によるエヒードの分割所有が承認された。カサレス家は、翌年2月までに、42の分割地(1区画あたり9ヘクタールを5ペソで)を共同体成員から購入している。

以上のようにして、1836年には755ヘクタールであった同アシエンダはディアス期末には3,512ヘクタールに拡大していた<sup>22)</sup>。

そして、その構造についていえば、1895年頃、同アシエンダではおよそ50%の土地がエネケン栽培に当てられていた。土地は生育状態の異なる多数のエネケン畑(plantel)に区切られていた。例えば、1895年にはそれぞれ名前のついた29のエネケン畑があり、作付け面積は合計23,817メカーテ(約950ヘクタール)であった。そのうち、収穫がない未成熟状態の畑は6(134ヘクタール：14%)、収穫に最適な成熟状態の畑は8(380ヘクタール：40%)、そして老年期に入り収穫が減少している畑は15(439ヘクタール：46%)であった。したがって、エネケン収穫は長期的にみても安定していた。そして、エネケン畑以外の土地は、輸送用インフラストラクチャー、加工セクター、未開墾の森林地(monte：ボイラー用の薪の採取地)、通路、家畜用の囲い場、そして将来開墾するための保留地などにあてられた。アシエンダの中心はカスコ(casco)と呼ばれ、屋敷(casa principal)、機械室、礼拝堂、囲い場、ティエンダ・デ・ラヤ(アシエンダ直営売店)そして労働者の小屋がある。機械室には分離機、ボイラー、梱包用圧搾機が設置されていた。分離機については、既に1879年には12馬力の蒸気エンジンを備え、4つのラスピング・ホイールをもつティッシュココブ地区で最大パワーを誇る機械を導入していた。さらに5年以内にホイールの数は8に増えた。1895年には、55馬力のアメリカ製蒸気エンジンと12馬力のイギリス製蒸気エンジンを使って独立した2台の分離機を動かしてい

た<sup>23)</sup>。

次にユカタン州のアシエンダの数と規模についてみておこう。1883年ユカタン州に存在した4,139の農場のうち約4分の1の843農場がエネケンの栽培を行っていた。その規模はメキシコのスタンダードからすれば小さい。1900年頃、ユカタン州で5,000ヘクタールを超えるアシエンダは少なく、大きなアシエンダでも大半は2,000~3,000ヘクタール程度で、もっとも一般的なアシエンダは1,000~2,000ヘクタール程度であった。例えば、アウグスト・ペオン（Augusto Peón）所有のユカタン州で最大の規模を誇るアシエンダ・ヤスチェでも6,000ヘクタールにすぎず、メキシコ北部や中部バヒーオ地域のアシエンダに比べると小さい。また、ユカタン州最大のモリーナ＝モンテス家の所有地は、エネケン畑、山林を合わせても10万ヘクタールを超えなかった。ちなみに、メキシコ北部のチワワ州のテラス家家は500万ヘクタールを超える土地を所有していた。しかし、ユカタン州のエネケン・アシエンダは豊潤であった。同時代の人の話では、1900~1910年の投資に対する利益率は50%を下らず、大きい場合には400~600%にも昇ったという<sup>24)</sup>。また、ユカタン州の1人あたりの輸出向け農産品生産額は1877年の9ペソから58ペソに急増しており<sup>25)</sup>、むしろメキシコでトップの位置を占めている。この高利益率は次にみる労働者の絶対的貧困化に基礎を置いていた。

## 2 外生的プロレタリア化と「再版奴隷制」

1880年代に入りエネケン需要が急増するに伴って、労働力不足は深刻化した。そして前節で示したように、その頃ユカタン州では、共同体の土地（エヒード）の分割が急速に進められた。むしろ、共有地の個人への分割はアシエンダによる共同体の土地収奪の開始を意味するとともに、共同体農民のアシエンダへの吸収の道をひらいた。

例えば、エネケン栽培地帯に含まれるモトゥル地区にあるゼムル村（Dzemuru）のケースをみてみよう。ゼムル村は、1889年に分割譲渡され

ている。村の全面積は7,284ヘクタールで、そのうち中央広場 (fondo legal) が418ヘクタールで、アシエンダ所有地が760ヘクタールで、残りの6,106ヘクタールがエヒードであった。当時の地図によると、338区画に分割されており、1区画あたり約18ヘクタールとなる。しかし、分割譲渡の記録によると、1区画あたり18ヘクタールを200人に譲渡したことになっている。これは、分割譲渡以前にアシエンダがエヒードの一部を獲得したためである。しかも、分割譲渡が決まると同時に売却してしまった者も多い。例えば、アセンダードのホアキン・パトロンはすぐに54区画を購入した。また、酒場でつけで酒を飲み、挙げ句の果てに土地を取り上げられた者も多かったそうである。5年後の1894年には、わずか35区画(10%)のエヒード分割地が被譲渡者の手に残っていただけであった<sup>26)</sup>。マクブライドによると、1910年ユカタン州の農民の96.4%が土地無しであった<sup>27)</sup>。もちろん、土地を失った農民は都市に吸収されずにペオンとしてアシエンダに吸収されていく。1880年に20,767人だったユカタン州のペオンは1883年には25,060人に、そして1900年には80,068人に増えている<sup>28)</sup>。わずか20年間で4倍近くになっている。アシエンダ・シュクユムでも、ペオン数は1879年の69人から1895年の122人へと倍増している<sup>29)</sup>。このように、ディアス期に入り共同体の土地の分割譲渡が急速に実施されたことにより、新たなアシエンダ労働力の創出、すなわち外生的プロレタリア化が進展した。

しかし、それでも労働力不足は解消されず、州外からの労働力の導入も積極的に行なわれた。なかでも、メキシコ北部のソノラ州に居住するヤキ族のユカタンへの流刑は有名である。ヤキ族は19世紀を通じて反乱を繰り返していたが、特にディアス政権が合衆国資本によって豊かなヤキ溪谷を開発しようとしたことに対して大反乱を起こして抵抗した。1886年、反乱指導者の死亡によって、大規模な反乱はおさまったが、その後もゲリラ戦が続いた。反乱の際に捕虜になったインディオは、ユカタン地方オリガルキー（特に最有力実業家オレガリオ・モリーナ：1902～06年にユカタン州

知事、1906～10年にメキシコ勸業大臣)と結託するディアス政権によってユカタンのエネケン・プランターに奴隷として売られた。1人あたり65ペソが政府に支払われたただけであったが、ユカタン州内では最低400ペソの値打ちがあった。その数は、反乱とは無関係な者も含めて7,000～8,000人といわれている<sup>30)</sup>。

また、国内特に人口過剰な中部諸州からのエンガンチェ(前貸し制度)による徴募も行なわれ、例えば1900年には、3,474人がユカタン州に移住している<sup>31)</sup>。そして、国外からも年季奉公人が積極的に導入された<sup>32)</sup>。

ついで、ペオンの労働条件の変化について触れておこう。労働力が恒常的に不足状態にあるユカタン州において、債務による移動の制限は初期からみられた。法的にも、既に1824年の法令によって、「債務を返済せずに就労地を離れてはならない」と規定されている<sup>33)</sup>。しかし、ペオンの債務に関する大規模な数量的データは残されておらず、個別アシエンダのデータがわずかに残っているだけである。例えば、メリダの近くに位置したアシエンダ・ヤシュニクおよびその付属地サン・イシドロのペオンの債務に関するデータを参照してみよう。同アシエンダには、1876年に76人のペオンがおり、その平均債務額は14ペソであった。そして、1890年には、ペオンの数は131人に増えており、その平均債務額も43ペソに増えている<sup>34)</sup>。

債務による拘束が強化されるにつれて、ペオンのアシエンダからの逃亡がみられるようになり、「逃亡ペオン狩り」という職業もできた。1860年のデータによれば、逃亡ペオン1人を連れ戻すと20ペソの報酬が与えられた。1905年にはこの報酬は50ペソに上がっている。また、新聞には逃亡したペオンの体形や債務額などのデータが掲載された<sup>35)</sup>。

ペオンの賃金については、日給15センターボ(1850年)、日給50～80センターボ(1900年)、日給1ペソ(1910年)というように確かに上昇しているが<sup>36)</sup>、物価上昇を考慮すれば実質賃金は低下しているといえる。例えば、主食のトウモロコシの価格は、2.78ペソ/100キロ(1897年)から、7.71ペソ/100キロ(1905年)に上昇しており、8年間でなんと3倍にも

なっている<sup>37)</sup>。また、1880年代以降のエネケン最盛期になると、出来高賃金制が導入されるようになった。例えば、除草作業は25 センターポ／メカーテ、刈り取り作業は25 センターポ／1,000枚、37 センターポ／1,500枚などである。これは結果的には、労働時間の延長および世帯主以外の家族労働力の動員につながった<sup>38)</sup>。

1908、1909年にメキシコを訪れたアメリカ人ジャーナリスト、J.K.ターナーが書き残した『野蛮なメキシコ』において、ユカタンのあるエネケン・プランテーションのティエンダ・デ・ラヤに関して触れられている。それによると、ペオンの給料はティエンダ・デ・ラヤの商品券で支払われていた。しかも、ティエンダ・デ・ラヤの商品の価格はいずれも高かった。したがって、ペオンは不足分を掛け買いで補わざるを得ず、その結果債務額が増加しプランテーションに縛られてゆくというメカニズムが働いていた<sup>39)</sup>。

そして、1895年頃になると、ペオンは債務額とは無関係にエネケンの価格変動に応じて市場で売買されるようになる。好景気の際は1,500～3,000ペソで、不景気時には400ペソで売買された。自給用トウモロコシ焼畑(milpa)へのアクセスというペオンの伝統的権利の剥奪に加えて、ペオンが債務額とは関係無しにエネケン価格の変動によって売買されるようになり、エネケン・プランテーションに商品奴隷制が誕生した<sup>40)</sup>。

このように、ブーム以降の慢性的労働力不足にもかかわらず、プランテーションの労働条件は悪化した。その理由は、ユカタン州の地理的孤立性によって労働者の移動が困難であること。そして、メキシコ北部とは異なり他に競合する産業が存在しないこと、などが考えられる。また、労働強化によるコストの切り詰めをせざるをえなかったプランター自身の金融的従属状況も考慮に入れておく必要がある。この点は次節で触れる。

### 3 鉄道とオリガルキー支配

刈り取ったエネケンの葉を機械室に運び、分離した繊維を最寄りの鉄道

の駅に運ぶためのアシエンダ内輸送網が発展した。これには、狭軌のフランス製のデュコビル（Decauville）軽便鉄道が使用された。1892年には、ユカタン州には230キロの軽便鉄道路線が敷設されていた<sup>41)</sup>。例えば、前述のアシエンダ・シュクユムでは、1889年アシエンダ内の輸送用にデュコビル軽便鉄道を敷設し始め、2年後には4キロの路線を完成した。路線には、客車1台、貨車1台、プラットホーム5箇所、車両牽引用のラバが備えられていた<sup>42)</sup>。

一方、1875年には、州都メリダとエネケン輸出港プログレソを結ぶ鉄道の建設が始まり、6年後に完成した。その後、エネケン栽培地帯とメリダを結ぶ形で路線は順調に距離を延ばしていった。1892年には、452キロの鉄道路線が出来上がっていた<sup>43)</sup>。そして、表8に明らかなように、その経営はユカタン州最大のオリガルキー・グループのエスカランテとモリーナの両グループに独占されていた。

ディアス体制末期、1,000以上の農場がエネケンのみを生産しており、そのうち850が分離機と梱包機を備えていた。これらのプランテーションは300~400の家族によって所有されていた。しかし、そのうち20~30の家族が約50%のエネケンを生産し、80~90%のエネケンの輸出を支配していた。彼ら地方オリガルキーは、カスタ・ディビーナ（神聖な血統）と呼ばれ、エネケン王国に君臨した<sup>44)</sup>。そして、他のプランターはリーエン契約によって完全に地方オリガルキーに、そして結果的に合衆国資本に従属していた。

## V 結びにかえて

かつてE. ウルフとS. ミンツはアシエンダとプランテーションの定義を提示した。それによると、アシエンダとは少ない資本で隷属的労働力を用いて小規模な市場向け生産をおこなう農場で、地主が隷属的労働力を用いて経営している。そこでの生産諸要素は資本蓄積のためだけでなく、地主のステイタスに対する欲望を充足させるためにも使われる。そして、プ

ランテーションとは、豊富な資本で大規模な市場向けに生産する農場で、地主が隷属的労働力を用いて経営する。そこでの生産諸要素はもっぱら資本蓄積のために利用されるのであって、地主のステイタス・ニーズとは無関係である<sup>45)</sup>。

本稿で概観したように、ユカタン半島では安定したエネケン需要に刺激され伝統的な牧畜＝穀物・アシエンダが1830年代にエネケン栽培を始め、徐々に小作地の取り上げ、近隣の土地購入による外延の拡大によって直営地を拡大してゆきプランテーションに移行していった。1880年代には、合衆国のエネケン需要の急増によって空前のエネケン・ブームが起り、エネケン・プランテーションは最盛期を迎えるとともに、労働力不足も深刻化し、債務奴隷制は著しく強化され、1895年頃には債務額ではなくエネケンの市場価格の変動によってペオンが売買されるようになり商品奴隷制が誕生した。このようにプランテーションの発展に伴って労働力の前近代的性格がむしろ強化されたところにユカタン経済の従属的發展に特徴的な制約があった。さらに、大多数のエネケン・プランターは現地のオリガルキーを通じて合衆国資本に従属していったのである。

最後に、本稿でとりあつかった時期以降についても、少し触れておこう。1902年合衆国では、大手農機具メーカー4社とモルガン商会よりなる大トラスト会社、インターナショナル・ハーベスター・カンパニー（以下IHCと略す）が設立された。同年、IHCとユカタン州オリガルキーのひとりオレガリオ・モリーナのあいだで低価格でエネケンを供給するための秘密協定が交わされた。その後、IHCはモリーナの商社などを通じてユカタンで生産されるエネケンの90%以上を低い独占価格で購入し続けた。一般のプランターはモリーナ・グループに借金を抱えており、低価格でエネケン売ることを余儀なくされた。こうしたIHCによる「間接支配」の問題、オレガリオ・モリーナに代表されるユカタン地方オリガルキーの性格、彼らとディアス政権との癒着については、別稿で論じることにした

## 註

- 1) クラインはこのエネケンの商業的栽培が始まる1830年からカスタ戦争が形式的に終結する1850年代初頭の時期を「パイオニア期」と呼び、この時期における生産技術改良のための試行錯誤がその後の土台として役立っていると指摘している。Howard Cline, “The Henequen Episode in Yucatan,” *Inter-American Economic Affairs*, Vol. 2, No.2, 1944, pp. 30-39.
- 2) *Ibid.*, pp. 45-46.
- 3) Allen Wells, *Yucatan’s Gilded Age, Hacienda, Henequen and International Harvester 1860-1915*, Albuquerque 1985, p. 127.
- 4) 北西部の伝統的アシエンダに関しては、Robert Patch, “A Colonial Regime: Maya and Spaniard in Yucatan,” Princeton Univ., Ph. Diss., 1979 に詳しい。
- 5) Enrique Montalvo Ortega, “La hacienda henequenera, la transición al capitalismo y la penetración imperialista en Yucatán: 1850-1914,” *Revista Mexicana de Ciencias Políticas y Sociales*, No.91, 1978, p. 146.
- 6) Robert Patch, “Apuntes acerca de los orígenes y las características de la hacienda henequenera en Yucatán,” *Yucatán: Historia y Economía*, No. 9, 1978, p. 12.
- 7) Víctor M. Suárez Molina, *La evolución económica de Yucatán a través del siglo XIX*, Mérida 1977, Tomo II, p45; Allen Wells, and Gilbert Joseph, “Corporate Control of a Monocrop Economy: International Harvester and Yucatan’s Henequen Industry during the Porfiriato,” *Latin American Research Review*, Vol. 17, No.1, 1982, p. 74.
- 8) カスタ戦争に関しては、拙稿「ユカタン・カスタ戦争（1847-53年）におけるインディオの主体性について」（『ラテンアメリカ研究年報』第6号, 1986年）参照。そして、同半島における砂糖産業の発展に関しては拙稿「ユカタン農村社会の変遷——征服からカスタ戦争まで（1528~1847年）——」（『南欧文化』12号, 1987年）参照。
- 9) Suárez Molina, *op. cit.*, Tomo I, pp. 49-50.
- 10) Allen Wells, “Violence and Social Control on Henequen Plantation,”

- Other Mexico:Essays on Regional Mexican History, 1876-1911*, Thomas Benjamin ed., Albuquerque 1984, pp. 217-219.
- 11) 拙稿, 1987年, 59 ページ。
  - 12) Montalvo Ortega, *op. cit.*, p.148.
  - 13) Wells, *op.cit.*, 1984, pp.222-223.
  - 14) Cline, *op.cit.*, pp. 37-40.
  - 15) Narcisa Trujillo, “Las primeras máquinas desfibradoras de henequén,” *Enciclopedia Yucatanense*, Tomo 3, México 1977, pp. 626-656.
  - 16) Cline, *op. cit.*, p. 40.
  - 17) Suárez Molina, *op. cit.*, TomoI, pp. 262-263.
  - 18) 小林袈裟治『インターナショナル・ハーベスター』1978年, 66-68 ページ。
  - 19) Montalvo Ortega, *op.cit.*, p. 146.
  - 20) El Colegio de México, *Estadísticas económicas del porfiriato:comercio exterior de México (1877-1911)*, México 1960, p. 89.
  - 21) Gilbert M. Joseph, *Rediscovering the Past at Mexico's Periphery:Essays on the History of Modern Yucatán*, Alabama 1986, p. 55.
  - 22) Wells, *op.cit.*, 1985, pp. 113-126.
  - 23) *Ibid.*, pp. 127-128,134-135.
  - 24) Gilbert M. Joseph, *Revolution from without:Yucatán, México, and the United States, 1880-1924*, Cambridge 1982, p. 36-37.
  - 25) José Luis Sierra Villarreal, “Yucatán 1850-1910,” *Yucatán:peonaje y liberación*, Mérida 1981, pp. 9-10.
  - 26) Blanca González R., “Porfiriato henequenero en Yucatán,” *Ibid.*, pp. 68-76.
  - 27) George McCutchen McBride, *The Land Systems of Mexico*, New York 1971 (1923), p. 154.
  - 28) Lawrence James Remmers, “Henequen, the Caste War and Economy of Yucatan, 1846-1883:the Roots of Dependence in a Region,” UCLA., Ph. Diss, 1981, p. 468;Suárez Molina, *op. cit.*, tomo I, pp. 160-161.
  - 29) Wells, *op. cit.*,1985, p. 137.
  - 30) Evelyn Hu-Dehart, “Pacification of the Yaquis in the Late Porfiriato,”

*Hispanic American Historical Review*, Vol. 54, no. 1, 1974, pp. 72-93.

- 31) Suárez Molina, *op. cit.*, tomo II, p. 317.
- 32) Wells, *op. cit.*, 1984, p. 226.
- 33) 「アセンダード、農業経営者、臨雇労働者の管理規定に関する法令」の第2条。Moisés González Navarro, *Raza y tierra: la guerra de castas y el henequén*. México 1970, p. 299.債務ペオン制の法制史的側面については、高田祐憲「19世紀後半におけるメキシコ農業構造——ユカタン半島におけるエネケン産業と労働力の従属化」(東京外国語大学修士論文, 1979年)に詳しい。
- 34) Wells, *op. cit.*, 1985, p. 174-175.
- 35) Wells, *op. cit.*, 1984, p. 224.
- 36) 賃金に関しては, Joseph, *op. cit.*, 1986, p. 66 参照。
- 37) Seminario de Historia Moderna de México, *Estadísticas económicas del porfiriato: fuerza de trabajo y actividad económica por sectores*, México 1965, p. 159.
- 38) Wells, *op. cit.*, 1985, p. 168.
- 39) John Kenneth Turner, *México bárbaro*, México 1980, p. 22.
- 40) Friedrich Katz, *La servidumbre agraria en México en la época porfiriana*, México 1980 (1976), p. 28.
- 41) Montalvo Ortega, *op. cit.*, p. 150.
- 42) Wells, *op. cit.*, 1985, p. 128.
- 43) Montalvo Ortega, *op. cit.*, p. 150.
- 44) Wells, *op. cit.*, 1982, p. 77.
- 45) Eric R. Wolf, and Sydney W. Mintz, “Hacienda y plantaciones en Mesoamérica y Antillas,” *Hacienda, latifundios y plantaciones en América Latina*, México 1975, p. 493.

(付記) 本稿は、1988年10月1日ラテンアメリカ学会西日本部会(京都外国語大学)における報告を基礎としたものである。コメンテーターをくださった大阪経済法科大学の原田金一郎氏には貴重な御意見を頂いた。記して謝意を表わしたい。

表1 ユカタン州のエネケン輸出額の推移  
(1802-1902年)  
(単位：ペソ、括弧内は%)

年	未加工	加工	合計
1802*	6,064 (10.1)	53,936 (89.9)	60,000
1845*	30,780 (31.1)	67,891 (68.9)	98,671
1869-70	522,632 (79.3)	136,320 (20.7)	658,952
1871-72	591,388 (78.8)	158,939 (21.2)	750,327
1872-73	558,413 (69.2)	248,839 (30.8)	807,252
1874-75	590,663 (81.8)	131,104 (18.2)	721,767
1875-76	547,198 (84.0)	103,744 (16.0)	650,942
1881-82	2,468,813 (92.4)	203,294 (7.6)	2,672,107
1882-83	3,073,961 (92.8)	237,101 (7.2)	3,311,062
1883-84	3,923,673 (94.2)	241,347 (5.8)	4,165,020
1902	36,432,791 (97.5)	929,910 (2.5)	37,362,701

\*1802年と1845年は、カンベチエ州を含む数字である。  
典拠：Suárez Molina, *op. cit.*, pp. 26-28, 42-43,  
Lawrence James Rammers, "Henequen, the  
Cast War and Economy of Yucatan, 1846-1883:  
the Roots of Dependence in a Mexican Region,"  
Ph. D. diss., UCLA., 1981, p. 790.

表2 ユカタン州の相手国別エネケン輸出額の構成  
(1872-73会計年度)  
(単位：ペソ、括弧内は%)

品目	合衆国	イギリス	キューバ	フランス	合計
未加工	524,137 (93.9)	23,922 (4.3)	550 (0.1)	9,804 (1.7)	558,413 (100)
加工	7,873 (3.1)	1,652 (0.7)	239,314 (96.2)	0	248,839 (100)

典拠：Rammers, *op. cit.*, p. 729.

表3 ユカタン州の相手国別エネケン輸出額の構成(1873-83年)

(単位: ペソ, 括弧内は%)

年	合衆国	イギリス	キューバ	フランス	ドイツ	合計
1873	532,292 (65.7)	26,269 (3.3)	241,388 (29.8)	9,870 (1.2)	100 (-)	809,919 (100)
1874	699,985 (79.1)	16,457 (1.9)	163,263 (18.5)	3,769 (0.4)	1,032 (0.1)	884,506 (100)
1882	2,265,272 (84.8)	149,739 (5.6)	150,808 (5.6)	47,135 (1.8)	59,152 (2.2)	2,672,106 (100)
1883	2,677,487 (80.9)	340,957 (10.3)	172,364 (5.2)	50,493 (1.5)	69,761 (2.1)	3,311,062 (100)

典拠: Rammers, *op. cit.*, p. 803.

表4 ユカタン州におけるエネケンとトウモロコシの作付け面積(1844~1910年)

(単位: メカータ\*)

年	エネケン	トウモロコシ
1844	16,000	5,430,144
1854	na.**	1,682,822
1860	65,000	na.
1862	84,018 (6.5%***)	1,149,774 (89.6%)
1869	400,000	na.
1878	780,000	na.
1883	1,002,905 (59.4%)	607,212 (36.0%)
1885	na.	767,604
1893	2,478,000	na.
1907	na.	112,500
1910	4,580,260	na.

\* 1 mecate=400m<sup>2</sup>

\*\* データ無し

\*\*\* 全作付け面積に占める割合

典拠: Suárez Molina, *op. cit.*, tomo I, pp. 144  
-147, González Navarro, *op. cit.*, pp. 180  
-188, Patch, *op. cit.*, p. 10.

表5 ユカタン州における土地譲渡 (1867-1910年)

	復興共和国期 1867-76年	ディアス期 1877-1910年	1867-1910年
件数	54	12,403	12,457
面積(ha.)	44,417	823,892	868,309
価格(ペソ)	15,953	470,909	486,862
平均面積(ha.)	823	66	70

典拠：Secretaría de Economía, *Estadísticas sociales del porfiriato, 1877-1910*, México 1956, p. 42.

表6 ユカタン州における土地譲渡の内容 (1877-1910年) (括弧内は%)

	共有地(エヒード)	国有地	荒蕪地	その他	合計
件数	11,982 (96.61)	151 ( 1.22)	246 ( 1.98)	24 ( 0.19)	12,403 (100)
面積(ha.)	130,340 (15.82)	450,916 (54.73)	149,866 (18.19)	92,770 (11.26)	823,892 (100)
価格(ペソ)	0 ( 0)	371,735 (78.94)	97,243 (20.65)	1,931 ( 0.41)	470,909 (100)
平均面積(ha)	11	2,986	609	3,865	66

典拠：Secretaría de Economía, *op. cit.*, pp. 220-221.

表8 ユカタン半島の鉄道網

路線	距離	建設期間	株主	合併
メリダ=プログレン	36km.	1875-1881	モリーナ・グループ支配	1902年 Los Ferrocarriles Unidos de Yucatán 設立 23,000株(1000ペソ) =2300万ペソ
メリダ=イサマル	67km.	1886-1890		
メリダ=ムナ=ティクル	80km.	1884-1904		
メリダ=カンベチェ	180km.	1878-1898		
メリダ=バジャドリー	181km.	1880-1905	エスカランテ・グループ支配	
メリダ=バジャドリー線の プログレンへの支線	na.	1886-1905		
メリダ=ベト*	154km.	1878-1900		
ズィタス=ティシミン (支線)	57km.	1888-1913		

\* F.U.Y.に買収される1908年まで独立していた。

典拠：Ivan Franco Caseres, "Casta Divina y Monopolio", *Yucatán : Historia y Economía*, No. 23, enero-febrero, 1981, p. 27, Suárez Molina, *op. cit.*, Tomo II, pp. 185-188, Gabriel Ferrer de Mendiola, "Historia de Comunicaciones", *Enciclopedia Yucatanense*, Tomo III, p. 563.

表7 アシエンダ・シュクユムの土地拡大過程 (1836-93年)\*

所 有 地 名	前 所 有 者 名	価格(ペソ)	年	位 置
San antonio Holactun	José González	?	1846	Xcuyum に隣接
——**	Silvestre Rivas	25	1836	Conkal
——	Lorenzo Camal	12	1845	Conkal の東
——	Santiago Aguilar	13	1845	Conkal の東
——	Santiago Aguilar	12	1845	Conkal の東
——	Casimiro Citoc	10	1846	Yaxkukul への途上
——	Timoteo Camal	15	1850	Conkal の東
——	Melchor Tacu	15	1850	Hacienda Kuman
——	Conrado Zapata	?	1857	Mocochá への途上
San Luis Pech	María Aguilar	?	1863	Sitpach
——	Romón Madera	35	1866	Conkal
San Fra. Yaxché	Ramón Lopez	?	1875	Sitpach
——	Ramón Madera	35	1877	Conkal
San Lázaro Copó	Manuel A. Pérez	100	1886	Conkal
公有地	連邦政府	?	1887	Yaxkukul
——	Pool	?	1887	Yaxkukul
Quinta Atenas	Bibiano Aguilar	175	1887	Conkal
Yuyumal	María Pech	10	1888	Yaxkukul
San Roman	Marcero Pérez	?	1893	Conkal
エヒード分割地	多数		1888	Conkal, Mocochá,
			1893	Sitpach, Yaxkukul

\* San Antonio Holactun (200メカーテ)を除いて、土地の面積は不明。

\*\* ——は、特に土地の名前がないことを示す。

典拠：Allen Wells, *Yucatan's Gilded Age, Hacienda, Henequen and International Harvester, 1860-1915*, Albuquerque 1985, pp. 121, 123.